

489.5-Sa85ㄅ

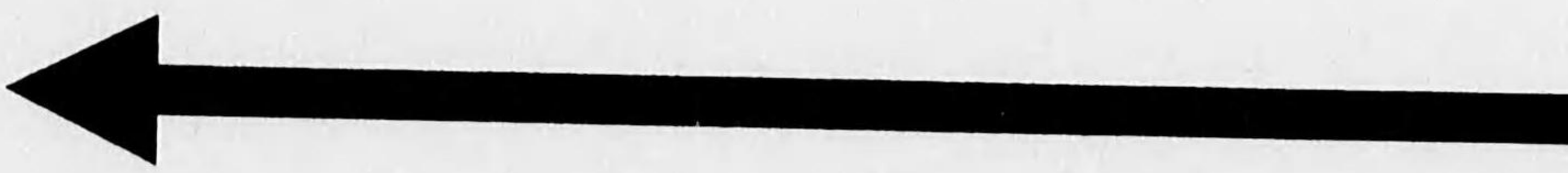


1200500743747

489.5  
85  
ㄅ



始



25 518

1674

489.5  
SA 85



佐藤隆三著

考

東京郷土研究社版

著者寄贈本





上野公園動物園にて

たぬき

動物園  
三  
三

三  
三

動物園  
三  
三



狸の安全地帯 文部省指定地  
山口縣佐賀郡中村大字向嶋 錦岳の西面



同 上 向嶋の西端 郷ヶ崎



藏氏三隆中田 筆齊北 圖 狸



江戶名所道載盡 漢草田圃の奇怪 廣景筆

622

## 自序

我が國の内で、里談俗説に富んでゐる動物としては、先づ狸に指を屈せざるを得ない。斯く狸が人口に膾炙してゐる所以は、狸の性能が他の動物よりも、日本の民族性に相容る點があるからである。狸は東洋獨特の動物で、その棲息は、日本、朝鮮、支那、滿洲に限られ、殊に日本に於て最も多く棲息するからでもあらう。狐の化けた話、猫の化けた話には、凄味があつて、恐怖心を以て聽かるゝに反し、狸の化けた話は、滑稽的で、茶番的で好奇心を以て迎へらるゝも、狸が悪獸でないことを意味するもので、狸の話に人間味の多いのもこれが爲であらう。

狸は、原始的犬族の一種で、舉動が鈍いのと、里近く棲んでゐる爲捕へ易く、朝鮮、支那、滿洲では近來著しく減少してゐるが、日本では相當保護してゐるので、狸の本場は、



先づ日本であると謂ひ得るばかりでなく、歐米諸國では頗る珍奇な動物として居る。その本場たる日本では、狸に對する理解が一般に乏しく、狸と貉とを別個の様に考へたり、又は狸に關する説話の如きも、これを日本の民族性に立脚して考へる人々の少なきことを、遺憾に思つてゐた所が、郷土研究社より本書の刊行を見るに至つたことは、私の最も幸とする次第である。

昭和九年十月下澣

阿佐ヶ谷の寓居にて

著者識す

目次

一	動物學上より見たる狸	一
二	日本の國民性と狸	七
三	狸と貉の辨	一五
四	狸と貉 <small>ねじな</small> の裁判	二〇
五	狸汁	二三
六	狸の皮算用	二七
七	八疊敷の説	三〇
八	實在的の狸の怪異	三三
	一戸叩き	三三
	二小豆洗ひ	三三
	三砂まき	三四
目次		一

目次

四	礫投げ	三
五	火の玉	三
六	狸の石	三
七	腹鼓	三
八	狸火	三
九	狸寝入り	三
九	かち／＼山の話は日本人の思想に反す	四
一〇	分福茶釜の正體	四
一一	四國と佐渡の狸	四
一二	新聞で世間を騒した狸	五
一三	狸に関する詩歌	五
一四	古人の記述に現はれたる狸の怪異	六
	人に化けて物云ふ狸	六
	心中狸	六
	人に化けたる狸	七

建長寺狸	三
妖怪物語並夜女に化けし事	三
古狸の筆蹟	三
老狸の書畫譚餘	七
狸の金	八
歌志久古狸を殺せし事	八
女に化けし狸	八
狸下女を犯す事	八
菩薩に化けたる狸	八
狸人を妖し却て死を取る	九
武田勝千代老狸を斬る	九
客變老狸	九
妖狸	九
狸宗達	九
彈三郎狸	九
靈幹と狸	九

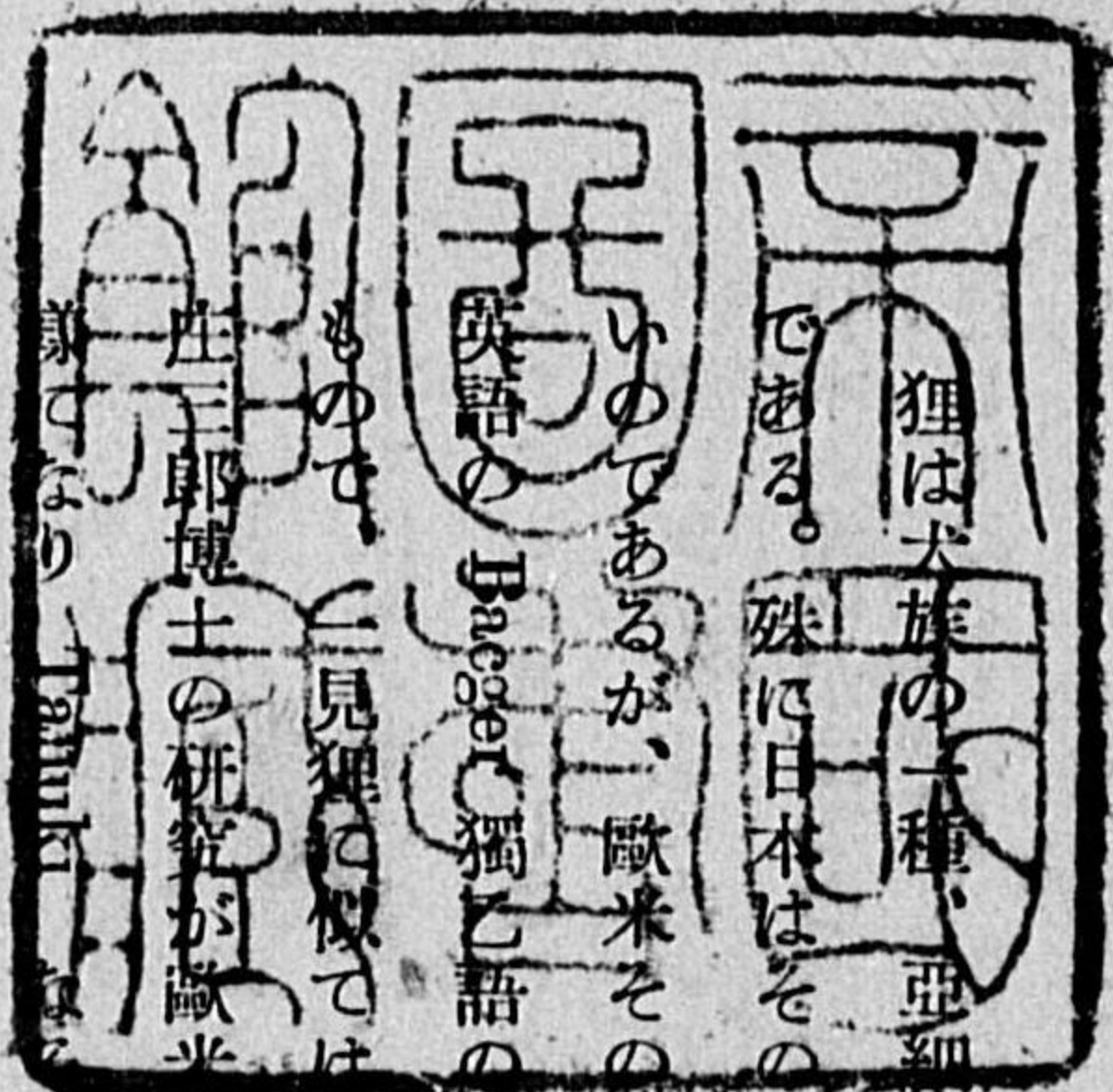
目次

圖版目次

上野動物園の狸……………卷頭  
 狸の安全地帯……………同  
 狸……………同  
 浅草田圃の化け狸……………同

入道に化けた狸……………九  
 足洗ひ……………一〇  
 狸の腹鼓……………三七  
 勝々山……………四〇  
 兎と狸の舟合戦 單手八丈狸金性水より……………四四  
 分福茶釜……………五五  
 狸の書……………六六

一 動物學上より見たる狸



狸は犬族の一種、亞細亞の東部即ち日本・朝鮮・滿洲及び支那本土に限られ棲息する動物である。殊に日本はその本場として、狸が澤山棲息してゐるので、別に珍らしくも思はないのであるが、歐米その他の國では、類例のない動物である爲に、甚だ珍とされてゐる。英語の Badger(獨り語の Dachs)なる語は、狸と譯してあるが、これは穴熊 Meles を指すもので、二見狸に似て居るが、全然別な動物である。狸が外國に知られたのは、故渡瀬 庄三郎博士の研究が歐米の學界に紹介されたのに端を發し、今日では外國一般に知らるゝ様になり、英語が各國共通語として用ゐらるゝ様に至つて居る。スタール博士(米國人、日本に渡來すること十數回、土俗學者として知らる。日本に關する著者多し。昨年八月東京にて物故す。)は日本の珍らしいものとして、山で

動物學上より見たる狸

は富士、植物では櫻と菊、獸類では狸、魚類では金魚、食物では海老の天婦羅等を擧げて居るが、外人の觀察としては目の付け様が面白いと思ふ。同博士の考へは、狸が單に動物學上より見て面白いと云ふ點よりも、土俗的説話に富んだ點に興味を持つてゐた様である。日本では寧ろ蔑視され、顧みられなかつた狸が、今日では世界的珍獸として知らるゝに至つたことは喜ばしきことと思ふ。

狸は皮が狐皮に次いで高價である爲に、支那でも、朝鮮でも殆ど捕り盡され、今日では日本と滿洲が主要の産地になつてゐる。日本内地でも年々減る一方なので、狩獵法で保護はしてゐるものゝ、狸は人家近き山野に棲息する性質を有する爲、人目に觸れ易く、且つ足が他の動物に比し弱く、ふらくしてゐる爲、狐よりも捕り易いと云ふ關係もある。又近年山林原野が盛に開墾せらるゝため、身を隠す場所がなくなつたのも、減少した一原因と考へられる。何れにしても保護を要すべき動物であるが、幸ひ、山口縣佐波郡中關村に狸の澤山棲んでゐる所が発見されたので、文部省では大正十五年二月同村向島の山林約五

百六十四町歩(官有林大部分を占む)に對し、狸の棲息地として指定し保護をすることにした(口繪参照)これは學術上から見ても至極當を得た施設で、他にも適當な所があらば、更に二三ヶ所位は指定して置く必要はあらうと思ふ。この向島山林には少くとも七八千匹の狸は居る。斯く繁殖した譯は、土地の習慣や迷信に依るものでなく、土地そのものが、而も海岸の絶壁で岩石が重疊し、人が容易に近づくことが出来ぬのと、岩石の間には天然の穴があつて棲息に適し、且つ狸の餌となる魚類の死んだものが、波の爲に海岸に打揚がるからである。もう一つは山林一帯に「ヒサカキ」と稱する植物が澤山自生してゐる。この植物はあまり大きくならない灌木であるが、秋になると、枝がしをれるばかり無數の豆粒大の紫色の實を付ける。その實がまた狸の最も好む所である。茲に一寸想像の付かないのは、狸と貓(ま)(穴熊、谷地熊、地熊又は笹熊とも云ふ。漢字にては狸又は野豕とも書す。)が共同して同じ穴に棲んでゐることである。狸は自分で穴を掘ることが出来ぬので、貓に掘らせ、その中に威張り返つてゐると云ふ横著振りを發揮してゐる所は、如何にも狸らしい所である。

狸には毛色に依つて、地方では八文字狸、十文字狸、白狸などと名を付けてゐるが、種類が違ふ譯でも何でもなく、共に毛色の變態したもので、八文字狸と云ふのは、面に八字形の黒色あるもの、十文字狸(十字狸とも云ふ)は背筋より前足に掛けて十字形の黒色あるもの、又白狸と云ふのは、白色に少しく赤味を帯びた毛色をしてゐる。黒田博士及び内田博士の書いたものを見ると、狸の正體が一層よく判るから、左に摘記して參考とする。

たぬき。一名むじないぬ(犬)科

東亞特別ノ動物ニシテ、いぬ屬ニ近クあなぐま屬トハ縁遠シ。頭胴五九〇耗、尾一七七・五耗、後足一〇二・五耗、耳六〇耗、冬毛ハあなぐまニ比シ細ク密ナリ。尾ハ總狀ヲナス。毛皮ニハ種々ナル變化ヲ示スモ大體三色變型ヲ識別シ得ベシ。即チはちもんじトハ上面ニハ文字ノ黒色アルモノ、じうもんじトハ前肢ノ黒横帶ト背面ノ正中ヲ縱走スル黒帶ト十字ニ交又セルモノ、又しろトハ白子ニシテ僅ニ赤味アルモノ(虹彩紅色ナリ)。

白子以外ハ常ニ眼部ト肢ハ暗褐色ナリ。夏ハ色濃シ。前肢ノ爪あなぐまニ比シ短カシ。三月頃交尾シ約六十二日ニシテ六仔ヲ分娩ス。食物ハ野鼠、爬蟲、兩棲類、昆蟲、果實等ニシテ有益動物ナリ。毛ハ毛筆ニ用ヒラル。地方ニヨリむじなト稱ス。(日本動物圖鑑)

狸は動物學上から見ると非常に珍奇な動物であると云つてよい。それはこの動物は犬族に屬するが、他に類例のない特異な體型を有する種類であつて、殊に東亞地方に限つて棲息し、その他の地方には全く似寄りのものすらないからである。併し、斯く學術的には珍奇な獸類であるが、我國では極めて普通な種類で、ことに昔から物語や傳説などに語り傳へられ、最もよく世に知れ亘つてゐる。(中略)

分布及習性。狸は我國では本州・四國・九州・北海道・朝鮮に棲息し、國外では黒龍江烏蘇里地方支那の大部に分布する。日・支・鮮・滿以外の地方には、世界何れの所にも見られないことは前述した通りである。

狸は山深い所よりは、寧ろ人里近い所に棲息し、岩の下や樹の株の下又は土堤や崖などにある穴の中に棲んでゐる。或は土藏寺院等の床下などに往々發見されることもある。狸は斯く多く穴居するが、しかも自ら穴を穿つことなく、大抵前記のやうな場所に自然に存する穴または他の獸類の造つた古巢を利用して棲み家とする。(以下略)(應用動物圖鑑)

## 二 日本の國民性と狸

我國で獸類の化け始めは、狸が最古い様に思ふ。推古天皇の三十五年二月に、陸奥國で貉が人に化けて歌を歌つたことが日本書紀に出て居る。今より千三百餘年の昔、人智で想像の出来ぬ貉が化けたのであるから、國府の役人も驚いたに違ひない。人間が朴訥で正直の時代であるから、國府に於ても充分調べた上で朝廷に奏聞に及んだものであらう。兎に角歴史上の記事としては興味あるものと云はねばならぬ。其の後平安時代から足利時代になると狸の化けた話は澤山ある。人に化けて歌を歌ふ所か、色々な風に化けてゐる。今昔物語や後崇光院看聞日記などを讀むと、その見聞が記されてゐるが、まだ此の時代には化け方が單純である。降つて徳川時代になると、狸も喇口になつて化け方が進歩してゐる。

一例を挙げると、松山の城主松平隠岐守を扶けて、お家騒動を起した悪人原を片端から懲らしめた刑部狸の如きものもあれば、金貨をした佐渡の團三郎狸の如きものもある。又讃岐の禿狸と云ふ狸は、化け方に妙を得、源平屋島合戦の芝居をやつて人に見せた話もある。化け方には上手下手のあることは勿論であるが、普通傳説里談に現はれた狸の化け方には一定の型がある。狐の化け方には狐型あり、猫の化け方には猫型がある様に、化け物の種類に依つて、化け方にそれ／＼異なる特徴が現はれてゐる。狸の化け方は男性的であり、滑稽的であり、道徳的である所に特徴がある。狐と狸は化け物の兩大關となつてゐるが、狐の方が立が悪く、執拗で陰險で徹底的で、人に危害を加ふることが多い。狸になるとアツサリ化けて、人を驚かす程度に過ぎない。害を加ふると云つてもその場限りで大した事はない。一ツ目小僧とか大入道とか、一本足の唐傘などと云つた様な、滑稽的な茶番的な寧ろ非常識な化け方を得意としてゐるに拘らず、その化け方の内にも、人間味のある所から見れば同じ化け物にしても、狸の方が狐よりも人に憎まれない。狸が日本人的である



日本の國民性と狸

とすれば、狐は支那人式の所がある。そこに兩者の相違がある様だ、狸の化けた話は、上代歴史にも載つてゐる點から考へても、獨立した大和民族の思想から發したものと見るのが妥當である。尤も狸の化ける話は支那にも朝鮮にもあるが、話の筋が日本のは餘程違つてゐる點があるばかりでなく、話の數が割合に少ない。之に反して狐の化ける話になると、支那の方が古



く、本場だけあつて、中々巧妙な話が多い。日本では水鏡、更科日記、今昔物語などに書いてある所が古い方で九尾狐の話などは支那から来たものである。日本で語り傳へてゐる化け狸の話进行分类して見ると、大體左の五種に區別することが出来る。

(一) 妖怪化 大男、一ツ目小僧、大入道(見越入道、三ツ目入道)、一本足の傘の化物

生首、火の玉等、

(二) 人間化 僧侶、武士、普通の男又は女、

(三) 物品化 鉢、桶、提灯、糸車等、

(四) 佛像化 石地藏、普賢菩薩、阿彌陀佛等、

(五) 無形の怪異 形を現はすことなく怪音又は奇聲を發する場合。

狸が化けると云ふことは、普通の常識で考へることが出来ない。今日誰しも狸の化けることを信じてゐるものはないのであるが、然しこれを國民固有の民俗思想の上から考へて見ると、デモノロジーなるものゝ存在を全然無視する譯には行かない。殊に上古矇昧の時代に於ては、日本民族に限らず、總ての民族の共通性として、動物は勿論、森羅萬象靈あり怪ありと信じてゐた思想を閑却することは出来ない。この思想は文明の今日に於ても、國の東西、民族の如何を問はず、夫々俗習的に傳統的に失はれてゐない。今日吾々が土俗



學として研究する所の俗信、傳説、祭祀等の事柄の内には、このデモニツク思想が多量に含まれてゐるのである。随つて狸が化ける化けぬと云ふ問題は別として、日本の國民性に現はれたる狸なるものに就ては、相當研究すべき價値のあることは云ふまでもない。

次に、老獺なる男性を罵詈する場合に、古狸又は狸爺やぢと云ふことがあるが、古狐又は狐爺とは云はぬ。これは、日本では一般に、狸は男に化け、狐は女に化けるものとしてあるからである。(日本、支那、朝鮮を通じて、狸は男にも女にも化けてゐる、狐になると、日本では女に化ける場合が多く、男に化ける例は極く少ない、寧ろ例外とさるゝ位だ、然し支那、朝鮮の狐は男にも女にも化けてゐる。)古狐とか白狐とか云ふ言葉は、遊女や藝者の様な者に對してのみ用ゐられてゐる。ツマリ狡猾な女と云ふことを意味してゐる。

〔川柳〕に

コン／＼と云うて狐の穴に落ち

白狐人を煙草のけむにまき

古狐よく金着の底をぬき

同じ川柳でも、狸になると無邪氣で滑稽的なものが多い。この意味から云つても、狸は寧ろ愛すべく憐れむべきものである。

狸の遺言茶釜には化けるなよ

狸と猫は化物の藝者なり

二間四面の金玉を狸もち

狸の傳説里談を綜合して見ると、男性らしく人格化して取扱つてゐる點に注意する必要がある。狸が化けて恩を返した話もあり、忠節を盡した話もある。其の他人間同様心中もすれば、復讐もする。恐喝もすれば、自殺もすると云つた様に、話の筋途に複雑性のある所に、日本の國民性をよく現はして居る。かの「かち／＼山」の話になると、趣を異にし、慘忍性を多量に持つてゐるが、この話は、支那の話を作り替へたものであつて、日本の國民性から出たものでないのである。一口に狸の話と云つても頗る多様で、支那、朝鮮から

出た筋のものも尠くはないのであるから、此の點は日本在來のものと區別して考へる必要がある。

### 三 狸と貉の辨

我國では狸たぬき(狸の字の略)と貉むじな(貉の字の略)を別個の動物の様  
に考へてゐる向が多い。地方に依つては、雄を狸、雌を貉と云つてゐる所もある。狸と貉はもとく同じもので名が異つてゐると云ふに過ぎない。その誤りを來した原因を詮索して見ると。漢字の「狸」を田猫たねこ・田怪たのけ・田公たのきみ・昌君はたしきみなどの字に當て簀めた爲、遂に「たぬき」と訛つて終つたものでないかと思はれる。馬琴の「燕石雜志」に「狸の異名を野猫やびやうといひ、猫の異名を家狸かじといふ。古は狸を糲かぢて田の鼠を捕とらしたれば、多奴幾たぬきは田怪たのけ又田猫たねこならん。和名鈔云。兼名苑けいめいえん云。狸(割註)音釐り和名太奴木、捕とら鳥爲し養者也といへり云々」。又同書に「唐土にて狸を野猫と異名すれど、この方は草野猫のらねこといふものあれば、狸を田猫たねこと訓じ、音をかよはし

てたぬきといふ。田は田舎の義にて野といふにおなじ」とあり。種彦の「草話風狸傳」には「狸の訓義はハタノキミの略なり。虎の猛きを山獸の君といふに對へて田島に禽蟲を求食ふものなれば爾いふなるべし。ノとヌと五音通へり。」とある。谷川士清の倭訓栞には西土の書に往々人家に狸を育て、猫の如く馴れしめ鼠を捕る事をいふ。「また「佩文韻符」に「狸。里之切、伏獸似狸、野猫俗作狸。」とある所を以て見れば、たぬきなる語は田猫田怪、田公、島君などの和訓から轉化したものと考へることは無理ではないが、字が違ふため、貉とは別物の様になつて終つたものと思はれる。

次に、むじなる語であるが、「草話風狸傳」には「狸。和名ムジナ訓義ムシネブリの略なるべし。好で蟲を舐ものなればなり。ナとネ音通ず。」とある。また「新編常陸國誌」には「狸。タヌキ。タヌキともムジナとも云ふ。筑波郡狸淵村はムジナブチとよめり。其性狐に類す。人眼を闇まし、形容を變化するに巧みなるものあり。或は文字を書するものあり。」とある。何れにしても狸と貉とは、言葉の違ひ、字の違ひからして誤りを生じたと思はる。

る點は、同じ動物でありながら、地方に依つて、たぬきの稱ありてむじなの稱なき處があり。むじなの稱ありてたぬきの稱なき處がある。東北、北陸、關東の北部地方では貉は居るが狸は居らぬと云つて居る。これに反して中國、四國、九州邊では、狸は居るが貉は居らぬと云つて居る點から考へても、兩者に差別のないことが判かる。また源重岳の「狸説」を讀んで見ると、「我國には貉といへる毛物別になし。狸を貉ともいへる也。其證には、美濃國仲山金山産神社服忌令の内に、狸を食すれば何か日のけがれとありける。其狸といへる文字に假名の付てあるを見るに、狸タ、ケ、如此假名の付てあれば、狸、貉はおなじものなる事疑所なし。又狸、貉同物に疑なき事は、夫木集の中に、寂蓮法師の歌に貉といへる題に「人住まで鐘も音せぬ古寺に、狸のみこそつゝみ打けれ」此歌貉といへる題に狸とよみたるなれば、是正しき證也、狸、貉同なる事明か也。」とある。

## 附記

たぬき、むじな共に同一であると云ふ事は、まみを穴熊、笹熊、地熊等と云ふが類で、

別に議論の餘地はないのであるが、むじなが日本固有語で、たぬきは漢字の譯語から來てゐると云ふ説を爲す人が多い様である。察するに、日本書紀には貉とあり。日本紀垂仁記に「牟志那」。同垂古記に「うじな」。和名鈔に「無之奈」等とある所からして、固有語としたものであらう。たぬきを譯語としたのは、馬琴や種彦の説を取つたもので中國以西でたぬきと云つてむじなと云はぬのは、支那文字が早く輸入された爲であらうと見てゐる。又貉皮を手貫（鞆の別名を手貫と云ふ）の押皮に用ゐた所から「たぬき」の名稱が起つたと云ふ人もある。聊か附記して参考とする。

古書参照

狸の異名

𧆏（爾雅註） 令長（抱朴子） 太奴木（和名鈔） すがたのむし（古歌）  
 多々毛（醫家千字文註） 稱古（康類本草） 手貫（倭訓栞） 多々計（紀伊風土記）  
 多々介（本草和名） 野猫（和漢三才圖會） たまき（倭名鈔）

貉の異名

無之奈（和名鈔） うじな（日本紀推古記） じうもんじ（佐渡志） みそねぶり（本草啓蒙）

貉子（盛京通志） 牟志那（日本紀垂仁記）

狸（和名） 太奴木（唐音） リイ。𧆏（たぬきの子）。脚短而走不速登樹甚速。其穴夏則奥卑下。冬則奥高上。老狸能變（化妖怪）與（狐）同。常竄（土穴）出盜（食果穀）鳴（與）猫同（屬故名）之野猫。或鼓（腹）自樂謂（之）狸腹鼓。或入（山家）坐（爐邊）向（火）乘（暖）則陰囊垂延廣（大於身）也。狸皮可爲（鞆）。和漢三才圖會

狸（和名） 貓（和名）。猫と貉とは毛色も肉も肥えたるもわきがたきまで似たり。只その別なる所は猫は四足ともに人の指のごとく、方言に熊のあらし子と云ふ。貉は四足犬に類す。狸はあくまで瘦せて胴のわたり長し云々。（兎園小説）

#### 四 狸と貉の裁判

栃木縣上須賀郡大芝村橋本伊之助なる者が、大正十三年二月二十九日(大正十三年は閏年)早朝鐵砲を肩にし獵に出掛け、同郡深岩山中の谷合で狸二頭を發見し、ズトンと一發放つたが、彈は狸に當らず、狸は面食つて附近の行詰りの岩穴へ逃込んだ。橋本は占めたとばかり狸に逃げられぬ様に穴の入口を閉塞して置いて、その日はその儘歸宅し、三月三日に再び同所に至り、閉塞して置いた岩穴に鐵砲を打込み、狸が飛出す處を、獵犬をけしかけ咬み殺させたのであるが、所が狸の獵期は十二月一日より翌年二月末日までとなつて居るに拘らず、三月三日に狸を捕獲したと云ふので、橋本は狩獵法違反として罰金二十圓に處せられたのである。然るに橋本は服罪する所かアベコベに、自分の捕獲したのは狸ではない。十

字貉じらなと稱する別個な獸であると主張し、遂に上告までして黑白を争ふに至つた珍事件があつた。

大審院では横田秀雄博士が裁判長として審理の結果、被告の上告を容れて原判決を破棄し、同十四年六月九日無罪の判決を與へた。この判決は大正の名裁判で、その判決理由が面白い。「被告は自然の岩穴を利用し、狸に對して事實上の支配力を確得したのであるから、この事實は狩獵法の所謂捕獲に外ならぬものである。さすれば右捕獲は大正十三年二月二十九日に完了したものと見るのが當然で、三月三日に至つて獵犬に咬み殺させた行爲は、既に捕獲行爲完了後に於て、獲物の狸を處分したものと謂ふべきであるから、狩獵法違反として罪を問ふべきに非ず。又被告が狸と貉の認識を欠いた爲に、狸に非すと信じてゐた點も充分酌量すべきである」と謂ふので、結局無罪となつたものである。

本事件に關し、當時帝大の渡瀬博士が鑑定人として出廷「狸も貉も同物異名の動物である。被告の土地「栃木地方」では、一般に狸を貉と稱してゐる。被告が十字貉と主張して

ゐるのは、背に十文字の黒色があると云ふに過ぎない。狸と貉を違つた動物の様に思つてゐる所は被告の土地ばかりでない、他にもいくらかもある。狩獵法には單に狸とあるばかりで貉を含むことを明かにして置かないのが遺憾に思はれる………」と述べて居る。

## 五 狸 汁

狸汁を食つて美味かつたと云ふ人と、不味かつたと云ふ人がある。美味かつたと云ふ人は、狸を食つたのでなくて、猫ま（笹熊又は穴熊とも云ふ）を食つた人なので、狸の肉は臭氣があり嗜好に適するものではない。「本朝食鑑」に「其肉臭不可食」とある位で、不味いのが本當である。昔は、お寺の精進料理に、狸汁と云ふものがあるが、實は蒟蒻汁のことで、酒を馨若湯、蛸を天蓋と云ふが如きものであらう。「芙蓉集」に「寮の窓妻は焦さじ扇なり、結局狸汁たぬきに化ける蒟蒻」とある。

狸を得しかば、庖丁して汁にさせたり。誰しも初めてくふ事なれば、一たびくひては頭

うちかたぶけ、しばし考へ、しばし味ふほどに、其匂ひいとあしく、みなく鼻を掩ひて吐き出だしたり。搗尾何某もおなじく喰ひしが、強食の名を得たりや有けん、其肉を只に呑みては汁をすひつゝ、三度までかへたり。さらば閑かに味ひてといへば、うまきさまなれど味ひもせで、汁打ち吸ひてひたのみに呑みたり。實は鼻おほふ人にもかはらざりけりとて興じぬ。(關の秋風)

可笑記三にさる御寺へ參る。いろくの御料理なるに雉子焼の、たぬき汁のとゞしめくとはいかなることによと心空にてみれば、さもなき精進物の御菜なり。寺かたの料理だて心得あるべし。(中略)たぬき汁は獸の歌合せ五番、左狐つかの穴ゑもん、右たぬき汁のこんにやくとあり。今も蒟蒻を汁に煮て、しか呼ぶなり。(嬉遊笑覽)

狸を汁にて煮て喰ふには、其肉を入れぬ先きに鍋に油を引いていり後、牛房、蘿蔔など

入れて煮たるがよしと人のいへり。されば蒟蒻などを油にていためて、ごぼう、大こんとまじへて煮るを名付けて狸汁といふなり。(屠龍工隨筆)

野はしりは皮をはぐ、みたぬきは焼はぎよし、味噌汁にて仕立候。妻は大根、ごぼう其他色々、古法は味噌汁にはあらず、酒のかす酒鹽を用ひたり。貞徳の狂歌に「腹までもまだ入たらすうましとて、舌つゞみうつたぬき汁かな」(寛永版、料理物語)

四足の内にも狸汁は賞翫のものと思えて、親元日記に寛正六年十二月朔日御被官廣戸但馬入道狸進上と有り。これを汁にすること守武千句また大草料理書等にある事は雜考の中に載せられたればこゝに云はず。(嬉遊笑覽)

又狸汁は、守武千句に「小町こそ四位の少將たぬきにて、百夜もおなじ丸手丸焼」とい

へるこれなるべし。されども今の蒟蒻を味噌汁にて煮たるにはあらず。大草家料理書にむじな汁の事(たぬき、むじなも料 理はおなじなるべし)焼皮料理とも云、但わたをぬき、酒のかすの少しあらひてさかはゆき程の時、腹の内に右のかすを入れて、則ぬひふさぎ、どろ土をゆりくとして、よく毛の上を泥にて塗りかくして、ぬか火して焼候也。やき様の事、下に糠をしき、上にも懸付てうむし焼にして土を落し候へば、毛共に皆土にうつり候を、其儘四足をおろし、なまぬる湯によき酒、鹽はいかにもかけしほしてさし候也と見えたり。これら名は些かのたがひにて、其實は今と大に異なり。(瓦礫雜考)

## 六 狸の皮算用

「世の中は兎角狸の皮算用、あでがはずれて泣きつらに蜂」とはよく世中の状態を穿つてゐる。狸の皮算用も此の意味に外ならずで、いくら昔でも、狸の皮を二三枚取れば相當の収入になつたものである。今日でも一枚十五六圓にはなる、であるから村の青年などが狸の棲んでゐる穴を見付け、捕らぬ先きからモー大丈夫ときめ込んで、青松葉で穴を燻し狸の出て来るのを今かくと待つてゐる。狸の方では、そんな計略は舊式だと云はぬばかりに、抜け穴を傳つて、遙か向ふの谷に逃げて終ふ。アレ狸が逃げたと、鐵砲でズドンとやると、狸がコロリと引繰り返へる。ソレ當つたぞ、俺の腕前を見ると、喜んでゐる内に狸は起上つて逃げて終ふ。二町も三町も離れてゐる狸に鐵砲の當る筈はない。狸と云ふ奴



は、野呂間の様で中々喇口なもので捕り易い様で捕れぬのが普通である。

さて狸の皮だが昔は今日以上に利用されたものだ。鞆ふたごの風を送る押皮は狸皮に限つたもので、刀鍛冶になると、殊に皮を吟味したものだ。狸の毛皮は柔かならず硬からず、風を平均して工合よく送ることが出来るからである。狐の皮になると、毛が柔か過ぎ、犬の皮になると硬すぎて、風送りが悪く、刀の焼き加減に斑むらが出来るとのことである。刀鍛冶は狸皮の内でも、佐渡さつと貉むぎと云つて、佐渡産のものを上品とした。

たぬき。舊事記に手貫たぬきと見ゆ、今も管鞆ふたごをいへり。たがたぬきなり。此皮手貫によるしきをもて名を得たるなるべし云々。(倭訓栞)

鞆鍛冶家皆用之吹草也以狸皮爲上。(和漢三才圖會)

筆に用ゐらるゝ毛には色々ある。羊毛、犬毛、鹿毛、鼠の鬣などであるが、狸毛を以て上品としてゐる。唐書、歐陽詢傳に「以狸毛爲筆。覆以兔毫。管皆犀象。非是未嘗書」とあるが、今日支那では狸毛が日本程豊富でない爲に、狸毛筆は珍重さるる傾きがある。日

本で狸毛を筆に用ゐたことは、既に聖武天皇の時代以前にあつた様に思はれる。

天平寶字三年六月二十八日 錢五貫七百二十三文……………十文題料狸毛筆一管直

(正倉院文書)

奉獻筆表一首 狸毛筆四管眞書一つ行書一つ草書一つ寫書一つ

弘仁三年六月七日

沙 門 空 海 進

(性靈集)

## 七 八疊敷の説

八疊敷と云ふことは、何が原因して起つたものか判らないが、「本朝食鑑」には「狸老者能變妖食人。若化作人客者。燒松杉葉而薰之則露本形」。或入山家坐爐邊偷人眼。向火乘暖而展陰囊者廣長四五尺。動兒女而延之作害」とあり。また「和漢三才圖會」にも「或入山家坐爐邊。向火乘暖則陰囊垂延廣大於身也」とあつて、同じ様なことが書いてある。陰囊を大きくすると云ふことは、支那の説話に之を發して居る様に思はるゝが、八疊敷と云ひ出したのは、別に意味のある譯でなく大きいことを想像したものと思ふ。昔から金粉を延ばすに、狸の腹毛又は陰囊の毛に金粉を含ませて延ばすと、一匁の金粉は八疊敷の廣さに延びると云つてゐる。今日でも、表具師が金粉を屏

風に附けるには、狸毛の刷毛を用ゐてゐる事實もあるから、こんな事から出たのかも知れぬ。

一説には、狸の腹部に鮮答の玉なるものがあると傳へられてゐる。この玉は昔から貴いものとして、古歌にも「やさかにの勾玉得んと野も山も、ふみとどろかし狸狩りしつ」とあるが、鮮答の玉は、今日でも牛馬の腹からまゝ出ることがある。ある獸醫の話に、一種の病氣に依り玉が出来るものと云ふ。鹿兒島神宮の寶物にも、鮮答の玉があるが、多分牛馬から出たものらしい。鮮答の玉が二つあれば、灯代用として八疊の間でも十疊の間でも輝らすことが出来るさうだ。又夜途をする時には、松明の代りにもなつて、至極調法なものだと云ひ傳へもあるから、こんな事が元をなしはせぬかと云ふ者もある。一體この玉は、茶褐色のものが多く、大きなものになると鶯鳥の卵位ある。磨けば光澤があるが、光を發すると云ふことは信じられない。

日本紀垂仁紀云。昔丹波國桑田村有<sub>レ</sub>人。名曰<sub>ニ</sub>壘襲<sub>一</sub>。則壘襲家有<sub>レ</sub>犬。名曰<sub>ニ</sub>足往<sub>一</sub>。是

犬昨ニ山獸名牟士那<sup>むしな</sup>而殺之。則獸腹有ニ八尺瓊勾玉。因以獻之。是玉今有ニ石上神宮。かゝれば鮮答は牛馬に限らず六畜にみなあり云々。(燕石雜誌)  
狸の玉。獸ノ玉 玉二つあり。水火の玉と云ふ。もし双玉を持て夜る行に道をてらす事松明の如し。但し片玉にてはてらす。 (萬寶全書)

## 八 實在的の狸の怪異

一、戸叩き。狸が夜中人家の戸を叩く話は、全國至る所にある話で、起きて戸を開けて見ると、更に人の來た様子もない。戸を閉めて寝に就くと又戸を叩く、立の悪る狸になると、主人の名を呼んだり、悪口を云ふものもあるさうだ。狸が人語をなすと云ふことは、如何にも受取り難いことであるが、「本朝食鑑」に「或能馴人而作人語ト陰晴告時變亦怪物也。」とある。武田信玄が幼少の時、狸に名を呼ばれた話もあり、他にも此の例はいくらかある。狸が戸を叩く時は、尻尾でバタ／＼と叩くものとされてゐる。

二、小豆洗ひ。狸の居る所には、この話も附物である。人家の軒又は寺の庭などで、深夜ザク／＼ザク／＼と小豆を洗ふ様な音を立てる。磐城地方の語り傳へでは「小豆洗ひませ

うか、人捕つて食ひませうか」と狸が歌を歌ひながらザク／＼と音を立てると云つてゐる。これは別に不思議なことではなく、足で小石を掻き集め音を立てるのである。歌を歌ふと云ふことは、信すべきことでない。

三、砂まき。夜間崖下又は木の下を通ると、頭から砂を振りかけられる話がある。これも別段不思議のことでない。狸が砂に轉つて毛に砂を含ませ、人が通ると、身振ひして上から砂を打懸けるのである。狸は太い曲つた木などには、よく登るものである。

四、礮<sup>たて</sup>投げ。崖の上又は庭先などから、小砂利の様なものを投げ付ける事がある。これは後足で蹴飛すのであつて、狸に限らず狐も狼もやる様である。狼になると五六十間も先きから、小石を飛ばすことがあるさうだ。

三條前の右大臣の白川の亭に、いづこよりもなく、礮をうちふること雨の如し。人々あやしみ驚けども、何のしわざといふ事を知らず。次第に打ちはやりて、一日一夜に二興<sup>おこり</sup>ばかりなうちけり。菴<sup>しんみやうり</sup>遣戸を打ちとほせども、その跡なし。さりけれども、人にあ

たる事はなかりけり。この事いかにして留むべきと、人々さまざまに議すれども、しいだしたる事もなきに、ある田舎侍の申しけるは、この事留めんいとやすき事なり。殿原面々に狸を集め給へ、又酒を用意せよといひければ、このぬしは田舎だちのものなれば定めてやうありてこそいふらめと思ひて、おの／＼いふが如くにまうけてけり。其時この男、さふらひのたゞみを北の對の東の庭にしきて、火をおびたゞしく起して、そこに、この狸をさまざま調じて、各能く／＼食ひてけり。酒のみの／＼しりていふやう、いかでおのれほどの奴めは、大臣家をばかたじけなくうちまゐらせけるぞ。かゝるしれ事するものとも、かやうにためすぞと、よく／＼ねぎかけて、その北は勝菩提院なれば、そのふるついちの上へ、骨投げあげなどして、よく飲み食ひてけり。今はよも別の事さぶらはじといひけるに合せて、その後長くつぶて打つ事なかりけり。是更にうける事にあらず。近きふしぎなり。うたがひなき狸のしわざなりけり。(古今著聞集)

五、火の玉。これも全国的で、夜中田舎の細路又は寺院の庭先などで、火の玉が轉つて歩

くことがある。火の玉と云つても、うすぼんやりした火の玉で、火の玉に化けるのが、狸の化け始めなさうだ。私が土地の中學校にゐた頃、中學校の近くの城山（磐城平驛の後ろの丘）に、狸の火の玉が、毎晩の様に出たことがある。それを金八と云ふ獵師が鐵砲で打取つた所が、大きな狸であつたと云ふので、一時評判されたことを記憶してゐる。狸が體から光を放つと云つても、それは不思議ではない。猫、河獺、狼の類が夜中光を發した話は、諸國に俚談として傳へられてゐる例は尠からずある。

六、狸の石。狸が石になつて轉つて歩くことがある。夜坂路などを通ると、坂の上から大きな石が轉つて來る。これは危険千萬と脇に除けると、こんどは石が逆に上に轉がる。月夜の晩などであれば、よく見ると、石に毛が生えてゐるから、直ぐ狸だと感付く。昔、江戸時代には、麻布の長坂や鳥居坂で、狸の石を打殺した話がある。又これに類する話は、地方に行けば澤山ある。

七、腹鼓。これも全國的の話であるが大抵月夜の晩などに、話が好んで腹鼓を打つ様に考



實在的の狸の怪異

へらるゝ向が多いので、紀忠基の歌に「いざ狸うで鼓うで小夜ふけて、月入るのちのなぐさめにせむ」とか又は狂歌にも「ぼん／＼が痛い嘘をつきの夜に、鼓の稽古休む小狸」など云つて、狸を風流なものにしてあるが、これは牝狸が子を孕むと、生理的關係に依つて、腹を打つのだと云ふ人もある。何れにしても狸の腹鼓と云ふことは事實あるものと考へてよいのである。

狸は月夜に腹をたゞき鳴し興ずといふ。狸の腹鼓とは、げに其音鼓の如し。

〔倭訓栞〕

狐は奸智ありて、疑ひ多き故に、彼がよこしまにひがめる性を忌みて、人愛せず。狸は痴鈍にして暗愚なれば人に憎まれず。予筑紫に参りし頃、或寺に宿りける夜、あるじの僧の、あれ聞給へ、今宵のさやけさに、狸ども集りて腹鼓を打なりといふに、耳をすませば、その音はるかに響けり。砧の音にやあらんと疑へば、さにもあらず。向ひたる岡のこなたに一むらの藪ありて、他には人家なし。狸ども、そこに集りて打なり。われこの寺に居ること、およそ九年になりぬ。三とせ過ぬる秋よりして、人々、この音を聞つけぬ。予もいぶかりて、その所を尋ね見しに、只狸が栖める穴のみあり。〔雲萍雜志〕狸面似<sub>レ</sub>猫似<sub>レ</sub>狐妖亦相似。(中略)鼓<sub>レ</sub>腹而樂。故俗稱<sub>二</sub>狸腹鼓<sub>一</sub>。〔本朝食鑑〕京に隱者あり、縫庵といふ。琴をよくひけり。信顔といへるもの横笛をよくす。二人相對して樂しむに狸庭に來りて、その尾を股間に入れ腹つゞみうちたり。

やよやたぬまし鼓うて琴ひかん、われ琴ひかんまし鼓うて。

縫庵

調子よくなぬ鼓うてわたづみの、をきな琴ひきわれ笛ふかん。

信顔

〔一言一語〕

八、狸火。昔から狐火は青く、狸火は赤いと云つてゐるが、今では區別せずに狐火と云つてゐる所が多い。これは狸より狐の方が魅力があり、勢力があるからであらう。尤も四國では狐が居らぬから一般に狸火と云つてゐる。狸火は夏から秋にかけて、夜間出るものであつて、私が讃岐琴平の西、財田大野村で見た狸火は、最初一つの灯が、忽ちにして二つ三つ四つになり、パツト消えたと思ふと、又忽ちにして一つ二つ三つ四つになる。明滅自在で、狐火と何等異なる所なかつた。狸火の起る原因に就ては、何も研究したことがないが、讃岐では、狸が牛馬の骨をくわへて歩くとき、口中より吐き出す息が、骨に含まれてゐる燐に觸れて、光を發するとも、又狸の涎が光るのだとも云つてゐる。

攝津國川邊郡多田村の鱧噉に燐あり。此火、人の容をあらはし、ある時は牛を牽て火を携へ行なり。これを知らぬ人、其火を乞ひて煙草をのみて相語るに、尋常のごとし。曾て害をなさず。多くは雨夜に出るなり。所の人は狸火なりと云。〔諸國里人談〕

九、狸寝入り。眠つたふりをする事を、俗に狸寝入りと云ふが、支那では、これを貉睡と云つてゐる。狸と云ふ奴は、不可解の性質を有する動物で、物を打付けられたり、驚かされたたり、又は人に追ひかけられると、俄に引繰り返つて倒れる。目を廻したのか、氣絶したのか、四足を縛られ吊されても、泰然自若として目をつぶつて、少しも動かない。本當に死んだものと思つて、油断をしてゐると、繩を喰ひ切つて逃げて終ふ。これで獵師などが往々失敗することがある。勝々山の狸も、此の手でお爺さんに捕へられ、お爺さんが居らぬ所を見済まして、おぼあさんを騙して殺したものであらう。

狸の種類々俗に辨じがたし。或人、山野に行き狸を見る。罅にて打殺す。罅の柄に掛て歸て、庭に打出し置けば、人の見ざる中に他を廻看して奔走ると云。人はを狸睡りと云。昔より往々に、狸の睡る事を語る。余案するに、是れ貉むぎなるべし云々。「中陵漫録」

狸は誠に捕へやすきものなり。追詰てうろたゆる時、死したるそふなといへば、その詞をきゝて、やがて死したる體をして道に倒るゝなり。その時行て捕ふれば面白く捕へらるゝといへり。「譚海卷十」

貉むぎは其毛柔軟ナル故罾トシテ良ナリ。(中略)晝ハ目見エズ耳聞エズ。故ニ人之ニ近ツキテモ動カズシテ眠ル狀ノ如シ。故ニ性好レ睡トテ貉睡ノ語アレドモ實ハ睡ルニ非ズ。若シ之ヲ打テバ驚テ走り去ル。「本草啓蒙」

## 九 かちく山の話は日本人の思想に反す

かちく山の話は、童話としては中々面白く出来てゐる様であるが、話の内容を吟味して見ると感服すべき程のものでない。正義人道を没却してゐる點から見ても、童話たるの價値に乏しいばかりでなく、作意に日本人の思想が現れてゐない。私の考へでは、支那の傳説を、支那式思想に依つて作り替へたものか、または支那人に依つて語り傳へられたものか、何れにしても、話の筋途が支那式であることは斷言出来る。この話が日本的でないと思はるゝ點を擧げて見れば、

一、狸が老婆を騙して打殺したと云ふ事は、遣り方が如何にも残酷であり、正義人道に立脚してゐる日本人の精神に反してゐる。



かちく山の話は日本人の思想に反す

二、狸が、老婆の肉を煮て、狸汁と偽り爺に食せたと云ふ事は、我々日本人の想像の付かぬ所で、また人肉を食ふと云ふ風は、日本には絶対ないことである。然し支那には、人肉を料理して食ふ例は幾つもある。「史記。齊、太公、世家。正義曰。菅仲曰。願君遠易牙豎刁。桓公曰。易牙烹其子。以快寡人。尙可疑耶云云」。また「黥布列傳曰。漢誅梁王彭越。醢之。盛其醢。徧賜諸侯。」とある。又支那の歴史を見ると、殷の紂王が文王の長子伯邑孝を殺し、その肉を羹として



かちく山の話は日本人の思想に反す



四四

文王に食はしめた話や、衛人が孔子の門人子路を殺して、其の肉を醢さいとして孔子に贈つたところか、孔子は、その無禮を怒つて、醢の容器を蹴飛ばした事が書いてあるが、昔は支那人は平

かちく山の話は日本人の思想に反す



四五

気で人肉を食つたことがこれでも明かである。  
三、兎が、狸に柴を負はせ、後ろに廻り、柴に火を付けて、狸を火傷せしめたのみか、火傷の薬だと云つて、蕃椒味噌を塗つたと云ふ事も、口

本人の思想では遣り得ぬことだ。武士道精神から云へば、最も恥づべき行爲である。

四、兎は、自分のみが木の舟に乗り、狸を泥舟に乗せて、舟戦さをなし、狸を溺死せしめたと云ふ行爲も、日本人の目から見れば、甚だ卑劣なるもので、武士道的でない。

以上の四點から推察する時には、此の話は、支那の書物を読んだ人が、支那人の思想を多分に取入れて作つたものとも考へられる。足利時代には、支那文學を取入れて出来た説話、小説等が尠くはないのであるから、この話も足利時代頃のものであらうと想像される。狸の話を書いてある支那の古い書物としては、搜神記、幽明録、情史、述異記、神仙傳等であるが、その中で、搜神記に出てゐる話が、かち／＼山の話に似てゐるものがある。似てゐるからと云つて、かち／＼山の話の元をなしたとは斷言出来ぬが、作者は多分この邊の話に依つて、ヒントを得て作つたものでないかと、想像されぬでもない。「搜神記」に出てゐる話は大體左の通りである。

吳興ト云フ所ニ百姓ガアツテ、二人ノ男ノ子ヲ相手ニシテ田畑ヲ耕作シテ居ツタ。二人

ノ子供ガ働イテ居ル時、父ガ遣ツテ來テ罵リ、打擲スルコト毎日デアル。二人ノ子供ハ家ニ歸ツテ母ニ其ノ次第ヲ告ゲタノデ、母ハ其ノ父ニ譯ヲ糺シテ見ルト、父聞イテ大ニ驚テ云フノニハ、我レ更ニ野良ニ行ツタコトモナケレバ、子供達ヲ罵ツタリ打ツタコトモナイ。想フニ鬼魅ノ所業ニ違ヒナイ。今度出タラ打殺スガヨイト云ヒ付ケタ。或ル時父ハ子供ノ様子ヲ見ル爲ニ、野良ニ行クト、二人ノ子供ハ、鬼魅ガ出テ來タ、夫レ打殺シテ終ヘト云ツテ、其ノ父ヲ擲リ殺シテ、其ノ死骸ヲ山際ニ埋メテ歸ツタ。所ガ鬼魅ガ夫レヲ知ツテ、父ニ化ケテ家ニ來テ居ルガ、更ニ氣ガ付カナカツタ。或ル日、道士ガ遣ツテ來テ子供ニ告ゲテ云フニハ、汝ノ父ハ唯ノ人デハナイト注意スルノデ、二人ノ子供ハ父ニ其ノ事ヲ話スト、父大ニ怒リ罵リ騒グノデ、之ヲ窺ヒタル道士ハ、大音ニ一喝ヲ與フルト、父忽チ古狸ト成ツテ床ノ下ニ逃ゲ込ダ、二人ノ子供ハ床ヲ剝ツテ其ノ古狸ヲ捕ヘトウ／＼殺シテ終ツタガ、曩ニ殺シタノハ、實ノ父デアアルノデ、改メテ之ヲ葬リ三年ノ喪ヲ終ヘテカラ、兄ハ自殺シ、弟ハ憤死シ、遂ニ其ノ家ハ滅亡シテ終ツタ。

かち／＼山の話は日本人の思想に反す

兎が火傷の薬を作ると云ふ事は、支那の傳説にあることで、支那では月に對する觀念が頗る神秘的で、月の中に兎トリス兎トリスと云ふ薬作りの兎（日本では俗に兎の餅つきと云ふ）が住んでゐると云つてゐる。陰曆八月十五日の仲秋明月の晩は、月の誕生日だと云つて、兎兎爺の像を飾り（兎頭人體の像）、これに色々な御馳走を供へてお月様を祭る風は、日本で月見の晩に、薄や團子等を上げて、月を賞するのと譯が違ふのである。支那の古詩に「採取シテ神藥高ニ。山端玉兎擣ツク。蝦蟇丸奉上。陛下ニ玉拌セヨ。」とあり。又〔傳玄擬天問〕に「月中何有ニ白兎ニ擣ツク藥。」とある所を以て見れば、兎と藥は關係のあることが判る。

兎が舟を作つて、狸と舟戦をしたと云ふ事は、兎が水に因みあるものとしてあるからで「月東海に出で玉兎波を渉る」など文章にも書かれ、因幡の白兎が鰐の背に乗つて海を涉つた昔噺もあり、波に兎は繪にも畫かれてゐる。又支那では、水を吸ひ揚げるポンプを「渴カクト兎」と云つてゐるから、兎が水に縁のある所からして、舟戦を想像するに至つたものであらうと思はれる。

以上の點を綜合して見ると、勝々山の話は、支那思想が遺憾なく現はれてゐる。狸の殘忍性と云ひ、兎の復讐手段と云ひ、支那人には普通ありがちの事であるが、これを日本民族性より見れば、甚だ奇異とせざるを得ない。尋常小學二年の教科書には、勝々山の話が出てゐるが、單に兒童に對し、面白くをかしく話して聞かせるよりも、狸と兎の行爲を、兒童に批判せしめ、話の筋道を明かにして聞かせる必要があると思ふ。

### 一〇 分福茶釜の正體

上州館林茂林寺の分福茶釜と云へば、直ぐお伽噺を思ひ出さるゝ程、ユーモアに富んだものゝ如く考へらるゝが、其の實單なる云ひ傳へに、尾を付け足を添へて作り上げたものに過ぎない。茂林寺は應永の頃、正通と云ふ和尚の開山に係るもので、その頃納所坊主に守鶴と云ふ者があつて、彼は一つの茶釜を大切に所持して居つた。不思議なことには、この釜で茶を煮れば、何百人の客に飲ませても、決して盡くることがないと云ふ調法な釜であつた。その後正通和尚が遷化し、守鶴は二代三代と十代の住職に至るまで、納所を勤めてゐたのであるが、彼また何年立つても鑿鑿として、年の取らざるも不思議の一つであつた。天正七年此の寺に大法要があつて、諸國より僧侶が千人も集つたのであるが、この釜



分福茶釜の正體

一つで、僧侶や參詣の人々に、茶を振舞つて、少しも不自由を感じなかつた。これで茶釜に「層箔がつき、「隨分其福也」と云ふ意味を取つて、分福茶釜と名付くるに至つたものと云ふ。

守鶴は十代の住職に仕へ、精勤を抜んでたと云ふので、檀家の人々が、守鶴の爲に慰安會を開くことになり、天正十五年の二月、この寺で盛大なる宴會が催されたのである、所が守鶴は酒が好きなものだから、とう／＼飲み過し、酔ひ潰れて、いゝ氣持で寝て終つたまではよいが、彼は正體を失ひ、尻尾を出し

て狸の姿となつて寝入つてゐる所を、小僧に見付けられて終つた。小僧の注進に依り、住職がその姿を見てビックリした。然し住職は小僧を口留めして秘してゐたが、翌日それと悟つた守鶴は、暇を乞うて、何處ともなく姿を消して終つたと云ふことである。

これが分福茶釜の實話であるが、これとても眉唾の話であるのに、それに一層輪を掛けて、茶釜を狸の化物として終ひ、今日では全く似も付かぬお伽噺となつてゐる。

かの文武火の茶釜は三斗ばかりもいるべき大きなものなり。蓋はなしと云。(中略)此頃茂林寺の守鶴の書けるもの黒本にしたるを得たり。書も見事なり。忍寶といへる二字をかけるをも先のとし寫し置けり。「一話一言」

〔淨瑠璃〕塵の世を悟りすまして茂林寺の、一間に杓を館林、袱紗捌きの折柄に、ア、ラ怪しや掛けたる釜は忽ちに、狸と化して飛廻る。それと見るより人々が、圓い天窓に鉢卷きは、南無三拔けたか腰衣、帯の薙刀法師武者、遁すな遣らじと取圍めば、

(新四)ソリヤ餘りな置かしやんせ。私やお前にうち込んで、狭くたのしむ四疊半、それを櫻の胴窓な、エ、憎くらしい炭手前、苦勞するとも白炭の焼かぬ昔は雪の枝。月の輪炭の名所を語らふ仲の古狸。

それは誠か空寝入り、何うも判らぬ腹鼓、打つて呉りうか但し又いけてながめる床の花、網代の籠の手を組んで、思案の中へ寺男、悪洒落さらす畜生め、引括らんと立かゝる。脱けつ潜りつにじり口、突上げ窓の片明り、遣が自在の釣り釜に、似たる姿の綱渡り。

(二上り)エ、扱々お目にかけます輕業は、茶筌飾りの離れわざ、クルリと返る穂屋香爐、蟹の蓋置、鶴の巢籠り、一本足の竹柄杓、馴れた手前の服加減、相伴ぢや〜。わけもなや面白や。お伽に残す文福の茶飲み話を語る一節。「鶯亭金升作」

## 一 四國と佐渡の狸

狸は世界の内で、日本、朝鮮、滿洲、支那に限られ、日本がその本場であるが、その日本の内でも、四國と佐渡は狸が多く、随つて狸の里談俗説も多いのである。狐と狸は、昔から化け物の兩大關となつてゐるが、四國と佐渡には狐がゐないと云ふので、狸が獨占的に巾を利かしてゐるのも珍とすべきである。

伊豫の刑部狸、讃岐の禿狸は化ける方面では天下一品とされてゐるが、四國の内でも、阿波、讃岐には狸の傳説なるものが殊に多い。各地旅行して見ると、狸を人格化し神佛視して、關東地方のお稻荷様格に、所々に祀つてあるのが目につくことである。徳島市寺町の御睦大明神みちつの如きは、堂々たる神殿造りで、實に立派なものである。これはお六つと云

ふ女狸を祀つたものであるさうだが、狸の神祠としては、恐らく日本一であらう。他にも何大明神とか、何神社とか稱して狸を祀つた神祠は幾らもある。又各地に、男女の人名を附して祀つてある祠も澤山ある。

次に佐渡であるが、之亦四國以上に、狸の説話が多く、狸が人間並に取扱はれてゐることである。二ツ岩の團三郎を初め、徳和の善達、潟上の幸達、關の寒戸、莚場の竹の尾、湖鏡庵の才喜坊など、云つた化け狸で、傳説的の説話に富んだものも尠くはない。北國地方の民謡に「お伊勢七度熊野へ三度、山の神さん月詣り」と云ふ歌があるが、これは二ツ岩の團三郎狸が人間に化けて、伊勢や熊野に行つた、彼の信仰心を稱へたものとしてある。

## 一二 新聞で世間を騒がした狸

大正十五年九月二十六日徳島毎日新聞の記事に。

丸鬚美人に化けた古狸にだまされて

萱の中へ伴込まれた炭焼男

廿一日午後四時、三好郡三繩村川崎、日浦利源（六七）が、山城谷村國見山の山中で、炭焼中、突然斗樽大の太さで三間餘もあらうといふ大蛇が現はれ、利源をひつくはへた儘、山中深く逃込んだとの急報あり。同山は曩にも大蛇が現はれ、之を目撃した者が發熱十數日に及びたりと云ふ事實より、適切りそれならんと、同地の青年團、消防組は非常召集を行ひ全山を包圍し、利源及大蛇の行衛を嚴探二日、廿二日午後同山の生茂る萱中に、二日

間食はず飲まずで、足は茨搔し、着物はズダ／＼に破られ、死人の如くグツタリとなり、ドンヨリとした眼ばかりパチ／＼させてゐる利源を發見、ヤレ／＼と大騒で應急手當を施し、やつと正氣に復したが、同人の話によると、大蛇はウソ蛇で、同地名物の狸にばかされたもので、廿一日午後四時過、一人の妙齡の丸鬚美人現はれ、こちらへ／＼と利源を手招くより、誘はるゝ儘、二日間全山をうろついたが、皆目人里らしい所へ出でず。歩み續けること二十有餘時間、其内何時の間にか件の美人は姿を消したので、是はと氣がついた時は、全身疲勞と飢餓とで身動きがならず、なさない事ながら、古狸の爲に此處で死んで仕舞はねばならぬかと、觀念してゐたのに、九死に一生を得たと大喜びとは、ウソの様な事實。

一三 狸に関する詩歌

一、和歌

更けぬるか時の鼓は打ちやみて

あらぬ音こそ野邊にきこえれ

住みなれて奥山寺を月今宵

面白狸つゝみ打つなり

思ふ事ならで幾夜を古狸

樂しかる音を打つ鼓かな

人はいざかゝる深山の樂しみも

景樹

惟貞

千陰

知らじ狸のつゝみきくとは

やよ狸鼓なやめぞ今しばし

人もかよはじ夜は明けぬとも

明はまたくるゝまつ間の狸こそ

己がすみかに陰こもるらめ

夜もすがら遊ぶ狸のひるねせし

夢おどろかす入相のかね

深山邊はまた宵ながら淋しきを

なくさめとてや狸くるらし

やよ狸なれが鼓の音づれも

片山里の友とこそきけ

深山邊に鼓の音の聞ゆるは

狸に関する詩歌

紀忠基

同

同

同

同

斐成



狸に関する詩歌

幾もいとせのふる狸かな

腹鼓打つや深山のあな狸

あやに楽しき御代の秋とて

飛火重にあらねど背おふしい芝の

もへ出づるにぞ狸なくらし

六〇

麗尾都

季 恭

紀忠基

二、狂歌

見越入道

さかさまに月もにらむと見ゆる哉

野でらの松のみこし入道

三目入道

日月にたとふ眼の三つあれば

一つは星のいりしなるべし

京 傳

東 作

置てけ堀(本所七不思議の一つ)

凄まじき月に老女のけはひして

しはすの霜のをいてけい堀

むじな

丑三つに吹きくる風の音づれば

ねいりむじなの目やさますらん

たぬき

冬がれて荒れたる野邊の腹鼓

これや狸の化けのかは音

一つ目小僧

雨ふりてふり出したる一つ目の

小僧はろくる首のうら目か

東 作

京 傳

参 和

ひ か る

狸に関する詩歌

六一

狸に関する詩歌

雨降小僧

さげて往くおかべの雨のふりかへり

にらむ眼は丸盆のごと

大入道

すむ穴も大廣袖の入道が

名には負はざるなまぐさき風

文福茶釜

文福の茶釜にばけのはへたるは

上手の手から水のもりん寺

みこし入道

くはつと開く大の眼にかゝる世の

千代のさかへやみこし入道

六二

めし盛

ひかる

酒ふね

橋洲

(以上「百鬼夜狂」の内より)

小 狸

不 詳

ぼんくが痛いと嘘をつきの夜に

鼓のけいこ休む小狸

狸寝入

四方山人 眞 顔

のびちぢむ八疊敷のたゝみさん

狸寝入りに君をこそまで

狸 汁

貞 徳

腹までもまだ入りたらずうましとて

舌鼓うつたぬき汁かな

狸 眼

万亭應賀

ふきがらで狸ねいりを見てとられ

狸に関する詩歌

六三

狸に関する詩歌

床の狐が腹つゝみうつ

壽 福

壽を長きに打てや腹鼓

ただた狸のちゝ千歳まで

かちく山

さの中に兎角狸の泥の舟

漕ぎいださぬがかちく山

蜀山人

泥舟

三、俳句

戸を叩く狸と秋を惜しみけり

花を心地むじなに酔へる雪のくれ

打ち落せ秋の雨夜のふる瓦

麥唄や狸女に化けんとす

蕪 抱 壱 村  
兔 一 塙 玉

四、川柳 (題。狸)

初午や狸つくく思ふよふ

金玉に寝た夜もあり武者修行

とまれともいふかと狸毎晩來

面白狸よいに來ておこすなり

きつかいのないのは女狸なり

ひの衣きると狸のはげ納め

花 李 兔 狐 友  
弄 朝 玉 麥 久

狸に関する詩歌

狸に関する詩歌

茶釜に成りて狸もこまりはて  
毛のたんとはへたをかぢや値を付ける  
狸が出ますかお乳母のおさだまり  
ぶんぶくは人を茶にして變化なり  
手ぜまでは出来ぬが狸のかくし藝

五、民 謠

夕夢見た大きな夢を、何を見た／＼富士のお山に、有馬の火の見に  
布袋のおなかに、とんぼの目玉に、狸のきん玉八壘じき、ちがいな  
いぞ、さうだ。(東京)  
狸娘の十二三もはやとうから、もはやとうから、分福茶釜に毛がは  
へた。チヨイ／＼ノチヨイ。(東京)  
狸さん／＼火を一つ貸さんせ、この山越えて、あの山越えて、火は

此處にこち／＼。(高知市)

若い衆音頭出せ、與一(狸の名)が踊る、今宵與一が出て踊る。

(徳島縣板野郡宮川村)

六、漢 詩

風卷飛花自入帷。一尊遙想破愁眉。泥深厭聽鷄頭鶻。酒涉欣嘗  
牛尾狸。  
睡眠髮鬆倦日長。却拋詩卷步回廊。狸奴幸自雙々戲。忽見人來走似  
獐。  
東 坡  
揚 萬 里

狸に関する詩歌

## 一四 古人の記述に現れたる狸の怪異

## 人に化けて物云ふ狸

世に知れたる關取の角力緋威と云は藝州の産なり。近頃年老て予が中の角力錦方に寓せり。予も年來知る者ゆえ時々呼て嘶させし中に云しは、彼れが故邑の在郷三里ばかりの村に老狸あり常に人と交語す。容貌里俗と異なることなし。緋威も屢々相對すと。狸碁を善くす。相手窮思すれば、輒凡夫かなしや目は見えす杯云てこれを嫚る。總じて人の如し。因て或はこれを困しめんとして傍人戸を閉し障子を塞ぐに、その隙より出て去ること幻影の如くにして遂に留ること能はずと。又或は戯に陰囊を抜きて人に覆ふ。人驚て脱逃せんと爲ればいよ／＼包結めこれを笑ふ。其状また人と違はずと。又或人はこれに弟子ありや

と問へば、弟子有りとは雖も、此邊にはなし。たゞ隣村なるちんば狐のみが我が弟子なり。然れどもまだ人に對して言語する能はず杯話せり。予疑て信ぜずといへども、時に錦も亦傍に在り、嘗て共に藝州に往てその人を知ると云へば、虚妄ともしがたし、又この狸よく古昔のことを語る。大率茂林寺の守鶴老の狸談に類す。然れば藝狸も長壽の者か。又隣村のちんば狐は里人時々これを視ることありと云。〔甲子夜話〕

附記。甲子夜話は平戸城主松浦靜山公の書かれたもので、此の話は文化頃の話である。

## 心中 狸

信州善光寺の片傍、農夫の息子その里の女子と密に馴染て、水漏さじと契りを結び。末はかならず夫婦にならん。互にいひ交したりけれど、何れもその家の一人兒にて、或は娶んといへば、嫁にはやらで掣にせんと、取々の論果もなく、後にはその中を裂れんとするに至る。然れば或夜その男、女の方に忍び來り、所詮論判むづかしくて、願ひのごとくな

古人の記述に現れたる狸の怪異

るべからず。されど斯までにいひ交したるを、今更反古になすべきや。然れば我れ御身と共に、死して冥土にて配まはんと思ふ。御身が心奈何にと問ふに、元來望む所なり。争まがで違背すべきと云ふ。さらば今宵人知れず忍び出て死なんとて、已に二人は家を立出で、小高き丘にうち登り、こゝに程よき松が枝あり。諸共に縊れんと、頓て一筋の繩とり出し、男は女の咽喉を結び、女は男の咽喉を結び、かの松が枝に引かけて、互に足を放ちければ、忽ち縊れ死しにけり。程經てその村の者、こゝを通りたりけるに、松が枝に繩にてくくり狸の死してありけるにぞ、是は怪しと傍を見るに、一人の處女倒れて居れり。立倚見るによく知りたる、同村の女子なれば、大に駭き近き傍の流れの水を汲とりて、口に含ませ面にそゞぐに、忽ちに息出たり。かの人々等故をとふに、女も包むべきやうあらず。しかゞのよし語りつゝ、共に駭くばかりなり。偕は女子の歎きにつけ入り、男にばけて誘引出し斯く計ひしものとは知りぬ。

因てその女子は、件の男に、妻めかけ合したりと、その所の土人の正しき物語なり。思ふに狸

かの女子を戲あそばすために誘ひ出し、ことの茲に及べるなるべし。然るに女子の結びたるは、人の手に成るゆえ解けず、狸の結びしは獸ゆえ頓とに解さりて墮ちたるなり。然れどもこの謀計、拙なきこといふべからず、狐の智これに十倍す。〔松亭反古囊〕

人に化けたる狸

狸は狐の災を爲すより甚し、四國に狐なくして狸の害多し。先年、備中の松山の近邊に老狸あり。月夜に見れば人に異る事なし。其言語もまた人に同じ、種々戲言を爲す人、鳥銃を以て打んとすれば、直に化して見えす。此狸、盲人になつて手を引かれ、毎月兩三度づゝ作州に至る。或時白日、犬出て此盲人及手引共を咬み殺す。人皆驚き奔走す。一二刻を過て大なる狸となる。是にて始て知る。備中の狸なるを。又備州某村の女、狸と通じ遂に孕す。一産に狸六匹を生ずと云ふ。如レ此狸の害多し。江戸の某狸を好て畜ふ。凡て狸の諸説を集て一書とす。並に狸の畫を爲す事甚だ眞に逼る云々。〔中陵漫録〕

建長寺狸

印宗書を贈て布袋の畫に讚辭あるものを添ふ。書に云ふ。これ鎌倉建長寺の山内に數百年住居たる古狸天明年中僧と化して描く所分明なる由、或年建長寺山門再建の企あるとき遠近の諸末山その外有縁の在家へ勸化の聞えありしを、かの狸聞き及びたる故未だ僧の出でざるうち、建長寺の繪符と宿々村々に積立の人馬帳を密に取出し、僧と變じ建長寺の長老と稱し近國を勸化せしに、中山道板橋驛止宿の夜本陣の紙障子に燈の影うつるを見れば僧に非して狸形なり。狸は是を知らず。去れども其坐體を見れば僧なるゆえ人々訝り耳語してその怪しきを言ふのみ。明日こゝを發して練馬の驛に抵り宿に投ず。及夜浴をなすと其婢用事ありて浴室にゆく。然るにかの僧獸尾ありて尾を浴桶にいれて浴するの聲をなし欺てその音を聞かしむ。婢見て駭き主婦に告ぐ。婦乃婢を叱し事の漏るを禁じ、その夜も事なくして明日又こゝを發し、これより青梅街道を宿次に駕籠にて送り行くに、駕舁夫ど

も化僧のことを漏れ聞きて、或處にて實否をはからんとて、竊に犬を駕の邊に呼び寄せたれば、犬即駕に踊りつき戸を咬み破つて衣のすみに咬みつき、駕を引出し僧を咬殺せしに人體變ぜざりしかば、駕舁夫ども悔恐れて早々役人へ届けたれど、これにては濟まず。其上へ申達して彼是する中三日を経たれば遂に狸となりてけり。夫より乗たる駕の中を見るに勸化の金子三十兩に錢五貫二百文ありし間、乃ち之を建長寺にかの繪符と俱に送り且具さに其事を言傳へしに、彼答にさも有るべし過日この寺より勸化爲すべきこと有しに繪符と人馬帳と失て無し。然れども餘人の盗みたるも考へざればかたゞ猶豫して有つる時にて今思合せぬ。この外に近來は紙筆墨或は畫帳の類間々失亡して人不審せしに、これもて思へば古狸習畫の料にせしかと云々。「甲子夜話」

附記。建長寺狸の話は、伊豆、駿河、甲斐等にもあるが、これと大同小異である。

妖怪物語並夜女に化けし事

本多氏の後室圓晴院といふ人、若き頃六番町三年坂中程におはせし時の事なりしが、化物屋敷にて、色々あやしき事どもあり。夜更け行燈のもとに並んで仕事などするに、側なる女の顔忽ち長くなり、又ことの外短くなり、或は恐ろしき顔になりて消失せる事あり。座敷にて火のもゆるは珍しからず。ある女病にて休み居けるが、其女紫色の足袋をはきて掃除せしかば、甚あやしく思ひながら女の休みたる所へ行て見れば、矢張打伏して居けるゆへ立戻りければ、さうじ仕たる女は見えず。かやうの事ども多くして、家内難儀するゆへ、加賀屋敷へ引移られしとの咄なり。是は我等度々承りし事ゆへ、こゝに記しぬ。是にて思ひ出せし事あり。明和九年目黒行人坂の火事とて、江戸中大半焼失せし大火事あり。其頃牛込若宮八幡宮の脇に住す加藤又兵衛が仲間、市谷左内坂を通りしに、きれいなる女泣居たるに逢けり。やうすを尋ぬるに、焼出され行くべきかたもなしといふ。然らば我かたへ來り一夜をあかし、知れる人の行衛を尋ね給ふべしといふ。やすらかに得心してつれ立來りけり、ひとりの男のことなれば、さし障る心遣ひなしと、仲間心に大いに悦び、伴

ひて部屋に入り、圍爐裏の火を澤山にさしくべて、心及ぶだけ馳走しけるが、覺へず少し居眠り目覺めみれば、彼女も居眠りたりしが、口もとに長き毛の見ゆる如く成りしゆへ、目をうち開き、きつと見れば、いつか古狸となれり。大擧丸を廣げて火にあぶり居るゆへ已たぬきめよく化したり。打殺して汁の實にせんと打かゝれば、狸初て驚き窓より飛出し逃去りたりとかや。又兵衛今は屋敷替して、一色喜多の屋敷と成る。「梅翁隨筆」

## 古狸の筆蹟

世に奇事怪談といひもて傳ふること、多くは狐狸のみ、貓、貉、猫の屬ありといへどもこれに及ばず。思ふに狐の人を魅す事甚害あり。狸の怪はしからず。かくて古狸のたましく書畫をよくすること世人の普くしるところにして、已に白雲子の芦雁の圖は、寫山樓の藏にあり、良恕のかける寒山の畫は、護園主人示されき。その縮本今載せて耽奇漫餘中に收めたり。これまさしく老狸の畫けるものにして、諸君と共に目撃する所なり。しかる





に、その書をかけることを、予嘗て聞けるは、武州多摩郡國分寺村、名主儀兵衛といふ者の家に、狸のかきたりし筆跡あり。三社の託宣にて、篆字、眞字、行字をまじへ、文章も違へる所ありて、いかにも狸などの書たらんと見ゆるものなるよし、これは狸の僧のかたち化けて、此家に止宿し、京都紫野大徳寺の勸化僧にて無言の行者と稱し、用事はすべて書をもつて通じたり。邊鄙の事故、有り難き聖のやうに思ひて、馳走して留めたりといふ。その後、武藏の内にて犬に見咎められてくひ殺され、狸の形をあらはしよとのことなりとぞ。その頃、此事を人々にも語りしに友人鹿山の同日の談ありとていへらく、予往年鎌倉に遊びしとき、川崎の驛に止宿し、問屋某の家に藏する所の狸の書といふものを見た。不意不崩南山之壽と書けり。その書體、八分にもあらず。眞行にもあらず。奇怪言ふべからず。いかにも狸の書といふべし。問屋の話に、鎌倉の邊の僧のよしにて、其あたりを勸化せし事五六年の間なり。果は鶴見生麥の邊にて犬に食はれしよし、此事はさのみ久しき事にあらず。予が遊びし十年も前の事なりといふ。此二條、その年月を詳にせずとい

へども、今その墨跡の現にその家に存したれば疑ふべからず。

因に云、五雜俎曰。狐陰類也。得陽乃成。故雖牡狐必托之女以惑男子也といへり。吾邦にも昔より、とかくに狐は婦人に化けたるためし多かり。しかるに狸はいかなる因縁かありけん。茂林寺の守鶴を始めとして、いつもく法師の姿になれるもをかしからずや。

又いとちかき事に一奇事あり。或人のの筆記に、文化四年丁卯ある人のもとにて、狸の書ける書といふものを見たり。(以下略)「兎園小説」

### 老狸の書畫譚餘

下總香取の大貫村藤堂家の陣屋隸なる某甲の家に棲めりしといふ古狸のいくだりは、予も早く聞きたることあり。當時その狸のありさまを見きといふ人の語りしは、件の狸は、彼家の天井の上ををり、その書を乞はまくほりするものは、みづからその家に赴きて、し

かぐとこひねがへば、あるじ、そのころを得て紙筆に火を鑽りかけ、墨を筆にふくませて席上におくときは、暫くしてその紙筆、おのづから閃き飛びて天井の上に至り、又しばらくしてのぼりて見れば、必文字あり。或は鶴龜、或は松竹、一二字づゝを大書して、

百八歳  
田ぬき

田ぬき百八歳としるしゝが、その翌年に至りては百九歳とかきてけり。是によりて前年の百八歳は、そらごとならずと人みな思ひけるとなん。されば狸は天井より折ふしはおりたちて、あるじに近づくこと常なり。又同藩の人はさらなり。近きわたりの里人日ごろ親みて来るものどもは、そのかたちを見るもありけり。ある時あるじ、戯れにかの狸にうち向ひて、汝既に神通あり。この月の何日には、我家に客をつどへん。その日さらば何事にまれ、面白からんわざをして見せ

よかしといひにけり。かくてその日になりしかば、あるじ、まらうどらに告げて曰く、某嚮に戯れに狸に云々といひしことあり。されば今日のもてなしぐさには、只これのみと思へども、渠よくせんや。今さらに心もとなくこそといふ。人々これをうち聞きて、そはめづらしき事になん。とくせよかしのゝしりて、盃をめぐらしながら賓主かたらひくらす程に、その日も申の頃になりぬ。かゝりし程に、座敷の庭忽廣き堤になりて、その院のほとりには、くさんゝの商人あり。或は葭簀張なる店をしつらひ、或は席の上などに物あまた並べたる、そを買はんとて、あちこちより來る人あり。返へるもあり。賣り物のさはなる中に、ゆでだこをいくらともなく簀にかけわたしゝさへ、いとあざやかに見えてけり。人々おどろき怪みて猶つらくとながむるに、こはこの時の近きわたりにて六歳にたつ市にぞありける。珍らしげなき事ながら、陣屋の家中の庭もせの、かの市にしも見えたるを人みな興じてのゝしる程に、漸々にきえうせしとぞ。是よりして狸の事、遠近に聞えしかば、その書を求むるものは更なり。病難利慾何くれとなく、祈れば應驗ありけるにや。縁

を求めて詣づるもの夥しくなりしかば、遂に江戸にもそのよし聞えて、官府の御沙汰に及びけん。有司ひそかに彼地に赴き、をさく／＼あなぐり糺し／＼かども、素より世にいふ山師などのたくみ設けし事にはあらぬに、且大諸侯の陣屋なる番士の家にての事なれば、さして咎むるよしなかりけん。いたづらにかへりまわりきといふものありしが、虚實はしらす。是よりして、彼家にては紹介なきものを許さず。まいて狸にあはする事はいよくせずと聞えたり。これらのよしを傳聞せしは、文化二三年の頃なりしに、この／＼ちは如何にかしけん。七十五日と世にいふ如く噂もきかずなりにけり。(此ごろ。兩國廣巷路にて、狸の見せ物を出だし、ありしに、彼大貫村なる狸の風聞高きにより官より禁ぜられしなり。

〔兎園小説〕

狸の金

こゝに常州行方なまかたの在片山かけに庵を結び、させる知識といふにはあらねど、一心不動に

行ひ澄して、年を経る老僧あり。童一人だにめし使はで、手自ら食事を營みつゝ、且暮に念佛して、更に他念なかりければ、その道德だに聞えねど、近郷の人々尊崇して、折にふれ衣食を贈り、家根壁の破壊くづれなど繕ひてとらせければ、結句世は安く思ひけり。或とき寒夜のことなるが、何者ともしらず外に來りて、老僧々々と呼聲に、たち出で是を見れば年舊狸としふるたぬきの徨たふさみたり。尋常の人ならば、大に恐怖なすべきを、了得さす件の法師なれば、更に動じたる景勢けいせいもなく、何事ありて來れると問ふ。當下狸膝そのとまを屈めて、おのれ山中を宿として雪霜も厭はぬ身なれど、年老てこの程の寒氣にほど／＼堪がたし、願ふはこの庵の爐邊におきて、寒夜を凌がせ給へかすと、餘儀もなくいふを聞、僧は哀れと思ひつゝ、いと易きことなれば、疾々來りて温まれよと、快よく諾がふに、狸は歡びて裡に入り、爐の邊に蹲みつゝ、身を温めて居るからに、僧は猶持佛に對ひ、看經して顧みず、一時間ばかりして禮を述べ、外の方へ歸り去りぬ。かくて後夜毎に來り、一時は山中なる、枯枝落葉など拾ひ集め、持來る事もあり。後には馴て日暮れば、狸を俟るゝ心地しつゝ、適遅あた遅く來るときは

古人の記述に現れたる狸の怪異

などで今宵はござりけん、おもひやるばかりなり。斯て冬去り春もや、如月の季よりは、弗おちに狸も見え來らず、その年の冬に至り、訪ひ來ること以前の如く、既にして十年も過ぬ。(中略)先頃宣ひし黄金のこと、後世菩提のため御寺へ奉ると聞ぬれば、人の秘おく黄金を竊み、その人の念かゝるときは、菩提の御爲になり難からんと思ひ、佐渡へ渡り、或は土砂に雜りつゝ、人の捨たるを拾ひ集め、新に吹かして参りたれば、斯く月日を費したりといひつゝ、出す黄金を見るに、いかにも輝々しき新金にて、いと清淨におぼえければ、僧はとりておし戴き、よしなきことを言しより、汝に幾干いくぞの苦勞を懸たり。然ながらわが望を得て、志願満足辱しと、叮嚀に禮拜す。この時狸のまうす様、これにて己が志も、達して候へど、人にな語り給ひそといふに、法師がこれのみは、人にかたらず止むべきならず。その故はこの黄金を、かく淺間しき庵におかば、賊の爲に奪はれん、人に預くるか然もあらずば、直に御寺へ納むべし、然る時はこの貧僧が、身に應ぜぬ黄金にて、人の不審もあるべければ、在のまに〜いはでは協かたはじ、たゞ其後狸は、弗に來らずと包みなば、是に

て仔細あらざるべし。但し汝は今までの如く、來りて寒を防ぐべしと聞て、狸も黙頭もくとうをり、夫よりこの法師があるほどは、冬毎に絶ず來りしとなん。「積翠閑話」

## 歌志久 古狸を殺せし事

常陸國麻生の里より小みち九里ばかりにして、七ツのちまたあり。七またとなんいひける。四方さう〜として廣野なり。左右には大樹の松どもしげり、向ひには富士がね、右には筑波峰、外山いくつもつらなりて、ゑがける波を見るこゝちさへせられて、けしきいふばかりなし。こは鹿島郡なる人々の、みちの奥に通ひける百里街道とはこれなめり。ある武士、夜ねひとつばかりに通るに、一丁ばかり先にもありなん、いとらうたけなる女の姿ことから卑しからぬが、身にうつくしき衣まどひ、花やぎたる帯しどけなく結びて、まだ近くも寄りこぬさきより、たよゝかに聲かけて、君には何處へかおはしつるよ、わが身はこの近きわたりに住みはべるものにて、麻生へこそ参らめとていでつるを、途を

たがへて連れたる従者にさへ別れたれば、夜ふくるまゝに恐しくもおぼえはべるなり。助けたびなば、おんみぐみえこそ忘れめと云ひつゝより來、かの武士憐れに思ひ、さらば伴ひまゐらせんとて、ちかぐとよりてももの語ひつゝ行くみちの程にて、男何くれといひよければ、女もいなにはあらぬさまにほのめくかほ、あいぎやうづきてえこそいはれぬ。男、今とて女の手をしたゝかにとらへ、こしかたなさと引ぬきて、むねのあたりにやありなん、手まさりにさしつらぬきければ、女はたゞはといつるまゝに、松の根もとにうぶしにたふれぬ。その武士は血にまみれたる刀をとりて、草の茂りたるなかにさし通しつゝ、大やうのごひとりのどかに歩みて歸りけり。次の朝まだき友がり行て、かゝることなはべりけると打ものがたりければ、さはとて人々駭きつゝ、やがて行て見るに、いくとせかを経たりけんとおぼゆるばかり、みのきたらんやうに毛長くおひいでたる狸にぞありける。後にある人狸ころしつる人にとひけるは、こだみはたぐひなき勳を現はし給ひにき。さはれいみじくあやうき業とこそおぼえつれ、殺し給ひたる女の、若しくはまことの女に

あらましかば、大なる誤ちにぞあらましとおぼえはべると云ひければ、さばかりの事知らでやあるべき、よべはもとより空いとくらかり、さるをまだ程近くもより來ぬさきつかたより、女の美はしきかほ、衣の色のきよらかなる帯の花やぎたるまで、あざやかに見えつるを、これをさへ怪しとせずば、怪しとすること別にまたありともおぼえず。さてこそ伐りてもすてたんなれと語りしとぞ。ものゝふはこれらの心得あるべきことぞ。その國の人の語りけるを、さてその武士の名を何とか云ひつると問へば、手賀といへる氏の人なりと答へき。さらば是も歌志久にこそありなめと、人々のいひあへりし。「猿著聞集」

女に化けし狸

寛政中、狸の女に化けたるが、夜な／＼山の宿の辻に立ちて人をたぶらかし、そのうち堀の船宿西村屋の庭なる青樹の邊りに穴してをりしを、彼處の船宿ども打集ひて、生捕たることの趣は、去歳の冬、海棠庵にて大かたは語りき。されば正しき事なるに、いまだ聞

かざりしとのばらもあなれば、これも亦のちくくに別に記して披講すべし。茲には北峯子のいはざるを補ふのみ。〔鬼園小説〕

狸下女を犯す事

小倉侯の神田明神下の中屋敷に、女隠居すみ給ふ。其附の下女の名は卯の、八月頃より行衛知れず。いかゞいたせしにやと過る處に、同年十一月のはじめ、長局の縁の下より手を出して、貝殻にて水をすくひ飲むものあり。皆々あれはと立出れば、奥深く逃込ける。化生のものにこそあらめとて、役人へ届けければ、則人を入れてさがし見るに、縁の下の隅にかくれ居たるものを引出し見れば、八月失ひし下女なり。髪は亂れ瘦おとろへて居たり。其仔細を尋るに、若衆三人に仕はれ、日々面白き事のみなり。其中に一人はむづかしくて苦しき事も有り。食事は代るくくいろくくのものを持來りて、毎日好味ばかり食し、何ひとつ不足なる事なしといふ。一體ふぬけ成て、言葉もさだかならず。やうく右の趣を聞

とりしなり。されば早速宿へ知せ申べしとて、當人をも遣はしけるが、程なく死けるとぞ。宿は神田邊にて、小酒をあきなふ者の娘なり。狸此屋敷には多し。夫れに是等の事あるよし申者ありし。此女を見出せし後おもひ合すれば、八月以來神佛へ備へし品、または仕まひ置きたる喰ものなど、自然と紛失せし事ありしが、是を盗みて女に食はせ置けるにやあらんと云ひあへり。扱此事を見聞し女ども、また見込るゝ事もあらんかと、大かた暇を願ひけるとぞ。其後日々祈禱など種々執行あれども、化けものゝ出たるといふにもあらねばそのしるし見ゆべき事にあらず。たゞ心ならずとぞ。〔梅翁隨筆〕

菩薩に化けたる狸

むかし愛宕の山に久しくおこなう聖ありけり。年頃行つて坊をいづる事なし。西の方に獵師あり。此聖をとうとみて常にはまうで、物奉りなどしけり。久しく詣でざれば飼袋に干飯など入てまうでたり。聖悦びて日頃のおぼつかなきなどの給ふ。その中にいよりの

給ふやうは。この程いみじくとうとき事あり。此年來餘念なく經をたち奉りてあるしるしやらむ。この夜頃普賢菩薩象にのりて見へ給ふ。こよひとゞまりて拜み給へといひければこの獵師上にとうとき事にこそ候なれ、さらばとまりて拜み奉らんととゞまりぬ。扱聖のつかふ童のあるにとふ。聖のたまふやういかなる事ぞや、己れも此ほとけをば拜みまいらせたりやとへば、童も五六度は見奉りて候といふに。獵師我も見奉る事もやあるとて聖のうしろにいねもせずしておきいたり。九月二十日の事なれば夜もくらし。いまやくと待に夜半すぎぬらんと思ふほどに、東の山の嶺より月の出るやうに見へて、嶺のあらしも涼しきに、此坊の内光さし入れたるやうにてあかくなりぬ。見れば普賢菩薩白象に乗りて、やう／＼おはして坊の前に立給へり。聖なく／＼おがみいかにぬしどのの拜み奉るやといふければ、いかゞは此童もおがみ奉る。おひ／＼いみじうたうとして獵師思ふやう。聖はとしごろ經おもたまちよみ給へばこそ其目ばかりに見へ給はめ、此童我身などは經のなきたるかたも知らぬに見へ給へるは、心得られぬ事也と心のうちに思ひて、この事心み

てん。これ罪うべき事にあらずと思ひて、とがり矢を弓につがひて、聖の拜み入たるうへよりさしこして、ちをつよく引てひやうと射たりければ、御むねのほどにあたるやうにて光りもうせぬ。谷へとゞろめきてにげ行おとす。聖これはいかにし給へるぞといひて泣たまふ事かぎりなし。男申けるは、聖の目にこそ見へ給はめ、はがつみふかきものゝ目に見へ給へば、心み奉らんと思ひて射つる也。誠の佛ならばよも矢は立給はじ、さればあやしき物なりといひけり。夜明て血をとめて行て見れば、一町ばかり行て谷のそこに大なる狸胸よりとがり矢を射とをされて死てふせり。聖なれど無智なればか様にばかされける也。獵師なれどもおもんばかりありければ、狸を射殺しそのばけをあらはしける也。

〔宇治拾遺物語〕

狸人を妖し却て死を取る

下總國弘法寺の日蓮の木像、毎夜、讀誦したまふとて、近邊の男女學て詣でける。住持  
古人の記述に現れたる狸の怪異

日堪上人、心得がたくて、ある夜、參詣の人をとどめ、かの木像に向ひ、法問の奥儀を尋ねて、若此返答なくば、只今打くだき捨んと責めしかば、何の答へもなかりし。上人、頓て斧をとりなをし、木像を引おろしければ、後の方より、古狸逃出けるを、追つめて討殺されしとなん。「新著聞集」

武田勝千代老狸を斬る

勝千代殿(武田信玄の幼名)十二歳の秋の末、或夕暮に御手水の爲に廣縁(ひろま縁)に立出られしに、日比に立置かせ玉ふ木馬の有けるが、忽ち身震ひし御名を呼かくるも、聞えぬ體にもてなして、餘り不思議さに、暫く其處にイみ玉ふ時に、彼木馬又曰く。如何勝千代軍術と劍術いづれか是なりや。劍術軍術共に是なり。是れ劍術の妙なりとて拔打に丁と切たまへば、手答して縁より下に百(もも)と落る。其後御小姓の今井三郎を呼たまひて、廣縁の下に何事かある見て參れと仰らる。畏て火を持ち是を見るに、大なる狸の血に染て伏たりとぞ。「武田三代記」

客變老狸

董仲舒下帷講誦。有客來詣(ヤウスケト)。舒知其非(ヤル)常。客又云欲雨(ナツメ)。舒戲之曰。巢居知風。穴居知雨。鄉非狐狸則是鼯鼠。客遂化爲老狸。「幽明錄」

狸妖

句容縣(コウヨウケン)粟村、民黃審於田中耕。有二婦人過其田。自勝上度從東適下而復還。審初謂是人日々如此。意甚怪之。審因問曰。婦數從何來也。婦人少佳。但啞而不言。便去。審愈疑之。預以長鎌伺其還。末敢斫婦。但斫所從婢。婦化爲狸走去。視婢乃狸尾耳。審追之不及。後人有見此狸出坑頭。掘之無復尾焉。「搜神記」

狸宗達

古人の記述に現れたる狸の怪異



當陸國飯沼檀林に狸の墓あり。彼地遊歴の序たづね見たりしが、墓碑高さ三尺計り正面に只狸宗達墓と四字を刻せり。年月は苔むして見えす。案内の者のいへるは、此宗達と云僧は當山住持四代の間隨身して最長命なりけり。法問論議衆に勝れ頗る頓才あり。一日臥場に入て睡りながら老狸となりて臨終せりと物語りき。「草話風狸傳」

彈三郎狸

佐渡國二ツ岩(或作三ツ山)といふ山中に、年來久しく棲む彈三郎といふ狸は頗る靈ありと云ふ。この老狸昔は人に金を貸けり。彼に借らんと思ふものは、金の員數と返壁へんぺきの日限を書つけ、これに名印を押して穴の邊りにさし置き、あけの朝亦行きて見るに、貸さんと思へば、その金穴の口にあり。後には金を借ものあまたあるまゝに、返さざるものも亦夥ありしかば、遂に貸さずなりしとぞ。醫師伯山は佐渡の人なり。三世方伎によし。その父嘗て佐渡にありし時、一夕隣里なる某甲急病ありとて、轎子こしを齎らし叮嚀に迎へらる。知る人

にあらねども、辭するによしなくて、その家に赴き、湯藥膏藥を與へて、亦送られて歸りつ。かくて四五日を経て、患人やれひとおこたり果たりとて、みづから詣來て喜びを述べ、謝物として方金數百顆を盆に盛りてさし出しにければ、醫師大きに怪しみこれを受けず。僅に四五貼の藥劑を進まからしたるに、かゝる謝物を受くべき事かは、われ年來こゝに住めば、豪家はその名を知らざるものなし。抑々足下は何人ぞと問へば、件の男うちほうえみて疑はるゝも理なり。われは何人にあらず。二ツ岩の彈三郎なり。まげてこの金を納め給ひねといふに、醫師頭みうち掉りて、彈三郎ならばいよゝ受けがたし。金錢は人間日用の寶にして禽獸の爲に益なし。然るに汝甚だ富たり。必ず不良の財なるべしといへば、彈三郎又いへらく、おのれが金は不正のものにあらず。或は兵火に係り、或は洪水によつて溝壑こうかくに埋れたるものを拾ひ集めて、貧人を濟ふのみ、疑はずして受給へと請ひすゝむれども、醫師固辭して受けざりしかば、その日は空しく立歸り、次の日に短刀一口をもて來つ。これを醫師に送りていへらく、この刀は貞宗が釧くわちたるものなれば、おのれ年來秘藏せり。國手の

蔭を蒙りて、疾病忽ちにおこたりぬるに、物受給はぬは心ぐるしくこそ候へ、これをば受納めて、わが志を果さし給へかしといひつゝ、刀を主人のほとりに置き、形は消えてなかりけり。されば彼の短刀(無銘)を伯山に傳へて家寶とせりといひ傳へたりとなん。(中略)佐渡に狐なければ、狸貉の人に憑くことあり。八丈島に狐狸貉なければ山猫人に憑くことありといふ。彼を缺けばこれを補ふ。物の患は造物者も全く除きかたかるべし。〔燕石雜志〕

靈幹と狸

朝鮮で靈幹と云へば、日本の弘法大師の様な有名な僧であるが、この靈幹は狸のお蔭で出世した物語が、東國輿地勝覽と云ふ朝鮮の古書に、次の様に書いてある。

高麗の文宗王の時、潭陽に煙洞寺と云ふ寺があつて、住持の僧が酒を造つて内證で飲んで居つた。所がその酒が時々盗まれるので、住持は、テッキリ小僧の靈幹が盗んで飲むものと思ひ、腹立ちまぎれに、靈幹をしたゝか打擲した。靈幹は無實の罪を蒙つたので、殘

念で堪らず。或夜、密に酒壺の側に菰を冠つて隠れてゐると、一匹の狸が遣つて来て、酒壺の蓋を取つて飲み始めた。靈幹は狸に飛付いて咽喉を押へ付け、打殺さうとしたが、狸は切りに謝るので、可哀さうに思ひ、逃して遣つた。その翌晩靈幹が寝てゐると、戸を叩いて呼ぶ者がある。靈幹は戸を開けて見ると、狸が昨夜のお禮だと云つて、一卷の書物を置いて行つた。靈幹はその書物を讀むと、不思議に、色々の智識が湧いて来る。學問も修業も段々積んで遂には朝鮮第一の名僧となることが出来た。

佐藤隆三著作目録

江戸傳説 坂本書店發行  
江戸の口碑と傳説 郷土研究社發行  
狸考 同

昭和九年十一月廿五日印刷 狸考  
昭和九年十一月三十日發行 定價八拾錢

東京市杉並區阿佐ヶ谷一ノ八四二番地  
著作者 佐藤隆三  
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地  
發行者 岡村千秋  
東京市神田區小川町二丁目四番地  
印刷者 松田印刷所

發行所 郷土研究社  
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地  
銀座口座東京二三九一七番

1674

~~022~~  
~~238~~

489.5  
SA85-

終